

正しく、速く、美しく書く

松楠会大川支部 西尾 英一

小学生頃より書に関心があり、以来テーマのような研究を継続し、ようやく要点が分かった感じです。高校ではかな書道の鴨居道、大学では藤原鶴来両先生の指導を受けました。藤原先生の授業では筆に水を含ませて、水黒板に書くとき期せずして学生たちから「よいしょ」と掛け声があがったのを覚えています。半紙に書いた毛筆文字も朱で添削され、短いコメントも頂きました。チョークで書く板書も見事でした。

大学での講義ではノート筆記するのに苦労しました。英語研究室の一年先輩榎田節夫さんが在学、付けペンで見事な文字を書かれ、倫理学の授業で隣の席であったので、ペンの持ち方を尋ねました。彼は英会話同好会の勧誘のビラを毛筆で書いていたが書体はノートの文字と同じでした。

長年の体験より正しく、速く、美しく書くためにはノートやはがきに書く小さい文字でも右手だけでなく左手も同じように紙や机に軽く触れる程度に持ち上げ、手や腕の下が透き間風が通る位開けることが大切、背筋を伸ばし、体全体で書くことが肝要と思います。毛筆でも太筆、細筆、鉛筆、ボールペン、万年筆、チョークすべて同じ調子で書きます。条幅は立って中腰で書きます。

今まで研究授業や役員会での板書を見て、見事な板書をすらすらと書く先生の実技を目の当たりに見て、敬服せずにはられません。授業も一段と引き立ちます。

定年退職後、心の教育相談員、学習規律の確立支援、ボランティアで英語学習に関わっていますが、子供たちの鉛筆の持ち方の正しい子は 1 クラスに 2～3 人程度しかいません。正しい子にはほめ、他の子には見習うように指導しています。

何事も上達するには 10 年かかると思われてなりません。あきらめずに練習を反復することが一番と思います。

(学芸・昭和 35 年卒)